史料室だより No. 8
東洋英和女学院史料室委員会
発　行 1980年1月28日

課外授業（ピアノ科・オルガン科・バイオリン科）

ピアノ科のこと

加藤信子

東洋英和女学院の音楽教育の一つの部であるピアノ科が、どのようにして種をまかれ、苗から育て上げられたかその成長の跡をたづねるという大変に大切な御用を史料室から頂きました。明治・大正・昭和初期の歩みについては、酒井広先生、高木勝代様、御令妹の井上茂登子様、宮沢愛先生、上田朝先生、堀内肥佐子先生の御記述やお話によって御導き頂きましたことをまず厚く感謝申上げたいと存じます。

わが校は創立から今年９５年を数えますが、その２年後明治１９年（１８８６年）にミス・スーゼ、ミス・モード、ミス・ウインデミュートの３人の先生方によってピアノ・オルガンのレッスンがはじめられました。従ってピアノ科は９３年という長い歴史をもっていることになります。酒井先生の記述にはわが校のみでなくクリスチャンスクールは音楽教育の開拓者であると記されています。その遠い昔、当時の日本の人々が西洋渡来の音楽をどのように眺めたか、数年のひらきはあるかもしれませんが、学院の設立に一役を荷われた平岩愃保先生の伝記のなかにこんなことが書かれています。「友人に誘われて宣教師クラーク先生の下にバイブルの講義をききに行ったが、先生宅で生れてはじめてオルガンという西洋楽器をみた。クラーク先生はこの楽器を弾き、うたう唱歌も珍らしくバイブルよりむしろオルガンを聞きたい。

ピアノ科教師（昭和１０年頃）

英語の唱歌（おそらく英語さんびか）を覚えたいという気がしきりにした」と。

この時代すでに非常に珍らしいピアノ・オルガン・唱歌が学校の教育にとり入れられたことはわが校のみでなく今日の音楽教育にとって大きな貢献であったことと感銘を覚えます。

日が経ち年がすすむに従って勉強する生徒も数を増して来てカナダの先生と共に日本人の先生方のお名前も歴史のページにとどめられるようになりました。奥野みね子（ピアノ）坂倉鶴子（ピアノ）今諏訪せい子（オルガン）先生がたです。今諏訪先生はかなり長い期間御在職になりましたようです。奥野先生は英和で学ばれ後にカナダに留学をなさった先生で、酒井先生も高木勝代様もこの先生からピアノの手ほどきを受けられたことを伺った時は夢のように遠い時代が一本の太い糸で

現在までつづいていることを確かめられた思いがいたしました。この当時（明治３０年代）からピアノ・オルガンは随意科として存在していました。

全校生徒数は約２００名、寄宿生が１００、通学生が１００、そのうちピアノを学ぶ生徒は２４・５名ほどいました。ピアノは講堂に１台、表玄関わきの応接室に１台、２階の上の小さい室に１台というようにあちらこちらに数台ほどでした。レッスンは裁縫・習字・絵画等の授業中にレッスンに定められた時間になると目礼をしてピアノ室に行きました。大体２０分程のレッスンを受けていました。現在のように誰もが自分のピアノを所有するのはむづかしい時代です。殊に寄宿生の多い当時は、通学生も含めて練習時間と練習ピアノの場所が示され、１日１人１時間の練習を２回に分けて与えられました。短い時間を有効に用いなくてはなりません。３０分という時間も５分くらい前から次の人が後に立って待っているということです。また当時の学校は教室も寄宿舎も先生方のお室も一つの建物の中にありました。練習と言ってもその場所が先生のお室に近いピアノであったりすると全部きこえてしまい、“余り熱心ではなかったようだ”とか“いつも音をまちがってますね”等のご注意をうけたりしました。寄宿は夏も冬も起床は６時です。６時半から練習時間にふり当てられ、しかも先生のお室の下のピアノで弾かなければならない冬の朝などはずいぶんつらかったと思い出をお話し下さった大先輩のお顔は今ではなつかしそうににこやかでした。その頃のピアノの月謝が高かったということはきいていましたが、学校の授業料が３円でピアノは５円だったそうです。

明治４２年（１９０９）に御就任になったミス・デーによりはっきりしていなかった規則を改めて制定され音楽教育の基礎とされました。プライマリー・ジュニアー、インターミディエト、シィニアー、等の等級をもち試験を受けて進級する制度です。リサイタルも年１回は必ずあって勉強を発表することが出来ました。当時卒業式にはプログラムのなかにピアノのソロが入り卒業生でなくてもピアノの上達した生徒が選ばれて演奏をしたということです。

最初からピアノ科の主任はカナダの先生が責任をとられ、明治も終り大正初期のころになるとミス・コーテス、ミス・コンスタンス・チャペルと今もカナダにいらっしゃるなつかしい先生方がピアノ科の主任をなさいました。酒井広先生はもうこのころから先生をなさいました。大正５年（１９１６）ごろミス・チャペルの御退任後にミス・メルトンが御就任になりました。メルトン先生は立派なピアニストで御在職の数年の間にピアノ科は大いに向上したということは有名です。二週に一度のリサイタルや毎週一度の音楽理論の講義など規定されたことは必ず実行をなさいました。大正７年（１９１８年）６月英国皇帝ジョージ五世の御名代としてコンノート殿下が公式に来日されました。殿下は御多忙な御滞在期間にわが英和をも御訪問になり、学校を挙げての歓迎を受けられましたが、その折歓迎演奏があり、メルトン先生の熱心な指導の下に井上（内田）茂登子様が、Josef Rheinberger作曲“The Chase” op. 5 no. 1を演奏して興をそえました。このことは当時としては大変に名誉なことであったという評判が伝わっています。

大正１１年（１９２２）からハミルトン先生の時代になりました。ミス・メルトンの御退職のあとを継がれて御就任になったミス・ハミルトンは、後に名校長としてその名を知られ学院の近代化に大いに力を注がれた先生ですが、来日なさったのは音楽の先生としてでした。が御就任後間もなく、校長クレーグ先生が御病気になられたため御一緒に一時ご帰国になりました２年間をミス・フルトンが主任となられました。その後一時ミス・カンニングハムもお勤めになりました。この頃の先生は主任ミス・フルトンと共に酒井広、宮沢愛、木村操、平岩美智子、堀内肥佐子、俣野富子の諸先生方です。

ハミルトン先生は再度また三度ピアノ科主任の責任をおとりになっていらっしゃいますが、やがてハミルトン先生が校長となられました後昭和５年（１９３０）にミス・クックが来日されました。

昭和８年（１９３３）新校舎が落成し、４階には防音装置をされた１０室から成る立派なピアノ教室が備えられました。そしてこの年の４月からレッスンは放課後に一せいに出来るようになりました。教師は主任ミス・クックと７名でした。この頃はグレードも定められており、生徒の能力に応じて学年を越えて各々のグレードに入られて勉強することが出来ました。その制度はカナダトロント音楽学校のものでした。等級は（グレード）６学級で、プライマリーが1.2.3.級　ジュニアが1.2.級　シィニアが終ると卒業になります。各々のグレードに課題曲があり、準備が出来ると試験を受け、パスをすると進級して次の段階の勉強に入るのです。試験はプライマリーからジュニアまでは受持の教師が立合いで主任が行われ、採点も主任一人でなさいました。が卒業試験は全教師の前で行われました。シィニア級の生徒は主任が担当されました。当時は放課時間が今よりもかなり早かった故か、レッスンは週２回で時間は２０分づつでした。

幼稚園師範科生はピアノが正課ですから全員がレッスンを受けなければなりません。ピアノ科教師全員が午前と午後のおそい時間に師範科生のレッスンの受持をしました。レッスン時間は３０分でしたが、正課であり大切な課目としてレッスンはもとより練習時間も熱心に勉強をしていました。毎学期の終りには、師範科の先生とピアノ教師の前で試験をうけます。短い曲とはいうもののリズムの異った数曲とさんびかが課題とされています。かなりの勉強を要するものでした。この当時も制服着用で、小学部は衿の線が一本、高女部は二本線、師範科生は三本線の入ったものでした。しかも当時はかなり年輩の上の人も師範科で勉強していましたのですが校内では制服着用でも往復は許されていたのでしょうか地味な和服と着かえてしまいますと参観に来られたお母様と間違えられるような人も一様におそくまで熱心にピアノを練習している様子をしばしば見かけました。

夕暮になり一日のレッスンを終って校舎を出ると静かな鳥居坂の通りで長い棒をもった人を見かけます。道に点在しているガス灯からその人の通った後には淡いグリーンの光が流れて行きました。

ミス・クックは昭和１０年（１９３６）に休暇でカナダに帰国なさいました。その後任としてミセス・ヘニガーが就任されました。当時はピアノをよく弾けるグレードの上級の生徒も多く、ミス・クック時代から１０年くらいの間に１０人あま

りの生徒がピアノ科卒業試験を受けパスをしています。石井靖子・藤野栄子・五十嵐応子・井上喜子・木村愛子・伏島きよ子・松本裕子・井上綾子・伏島道子・宮沢照子・（全旧姓）等の方々で、パスをすると適当の曲をととのえて４０分か５０分くらいの時間を用いリサイタル又はジョイントリサイタルをしました。卒業式にはピアノ科卒業の証書を頂き、式のなかで演奏をしてその力を認めて頂くことが出来ました。この時代はピアノを勉強するためには充分に練習する時間もあった幸せな時代であったと言えましょう。けれどもいつしか暗い、目に見えない圧迫が押しせまり出しました。カナダの先生方もだんだんに御帰国になり、疎開等というはじめて聞く言葉と共にピアノ科の生徒も次第に少くなりました。ヘニガー先生が学校を辞められて御帰国になった１８年（１９４３）ごろから宮沢先生が主任の責任をとられました。軍歌が幅をきかせ、ピアノは遠慮しながら弾くようになりました。東京深川・江東一たいが傷めつけられた３月９日・１０日の大空襲を期にしてピアノ科は一時閉鎖されることになりました。約１０年通いなれた学校への道をいつまた生きて歩くことが出来るかどうか悲愴な思いをもってふりかえり、ふりかえり別れたことも今はなつかしい思い出です。（ピアノ科教師・昭和２１年～５３年度末までは主任）

戦後再開以後のピアノ科については、更に加藤先生が続けて執筆していらっしゃいます。何かの機会に続編として発表させて頂ける折があれば幸いに存じます。（編集者）

Graduating Piano Recital

by

Yoshiko Inoue

and

Aiko Kimura

Friday, February 18, 1938
at 2 p. m.

TOYO EIWA JO GAKKO AUDITORIUM

PROGRAM

1. Italian Concerto, Allegro moderato.....*Bach*
   Aiko Kimura

2. Sonata, Op. 27, No. 2.....*Beethoven*
   Adagio sostenuto, Allegretto, Presto agitato
   Yoshiko Inoue

3. Etude, Op. 10, No. 5.....*Chopin*
   Etude, Op. 10, No. 12.....*Chopin*
   Aiko Kimura

4. Polonaise, Op. 40, No. 1 .....*Chopin*
   Yoshiko Inoue

5. Chorus: Home on the Range.....*Arizonian Folk Song*
   The Nightingale.....*Mendelssohn*
   Fourth Year Class

INTERMISSION

6. Hungarian Rhapsody, No. 6.....*Liszt*
   Aiko Kimura

7. Chorus: Wanderer's Night Song.....*A. Rubinstein*
   Whispering Hope.....*A. Hawthorne*
   Fifth Year Class

8. Concerto, Op. 25.....*Mendelssohn*
   Andante, Presto
   Yoshiko Inoue Aiko Kimura

ピアノ科卒業記念ジョイントピアノリサイタル

井上　喜子　　木村　愛子

オルガン科の想い出

長倉　茂子（旧姓平山しげり・大正１４年卒）

もしも、六十年前英和のオルガン科に入らなかったら、この年になっても、人生は最後まで青春の心でと云えなかったであろう。

その頃、女学部二年になると、ピアノかオルガンを習う事が出来る。たしか裁縫の時間に２０分間を、個人レッスンを受けにピアノなりオルガンの定められた先生の教室へ習いに行くのである。私の小学校時代からの親友がピアノ科に入るというので、私もピアノを習いたいと父に申出たところ、「お前は小さい時から、家のオルガンをひいているから、オルガン科に入ればいいではないか」と云われ、私は素直にその通りにした。ところがオルガン科に入ったのはその時私一人、上級生に佐藤みち子さん（後に宗教音楽家津川主一夫人）が居られたのをおぼえている。ピアノ科にはクラスから４・５人入られた様だ。故に友達が「平山さん、あなたのお父さん牧師さんなの？」ときいた。当時は牧師伝道師の娘以外はオルガンを奏かない様であった。その頃オルガンは講堂に１１個ストップ付のが１台、体操場に１台、２階のどのお部屋にだか１台あった様におぼえている。

最初に物静かな今諏訪先生がオルガンのレッスンをして下さった。日本判の「オルガン教則本」を用い、又他に指の練習にハノンの６番位まで習い音階なども奏いた様だ。やがて１年位たって、プライマリーの試験を受ける様にとの事で、その日は外人の先生の外、日本人の音楽の先生３・４人の前で、きめられていた曲を奏いたり、サイトリーディング（初見）のテストは全々知らない曲をその場でいきなり奏かされたりした。無事プライマリー卒業。その間一年に２・３度講堂でピアノ科オルガン科生のリサイタルがあり、その都度奏いた様におぼえている。故に本科の成績は席順がどんどん下って行く。プライマリー終了後はジュニアになり、ミス・ハミルトンに依りEdition Peters:“Harmonium Album”という本からバッハ、ヘンデル、フランク、ベートーヴェンをはじめ、種々の作品の勉強をして頂いた。やがて今度はオルガン最後の試験をとの事で、４・５人の先生が私の奏くオルガンを囲んできいていらっしゃる中で、１・２曲奏き、さすがに最後のサイトリーディングはむつかしい曲の様だったが、どうやら英和の音楽初まって以来の点を上げるとおほめにあづかったりした。そしてプライマリーの時もジュニアのも、英語で書かれたお免状を頂いたが、みんな奏きなれたオルガンや家と共に戦災で灰になってしまった。

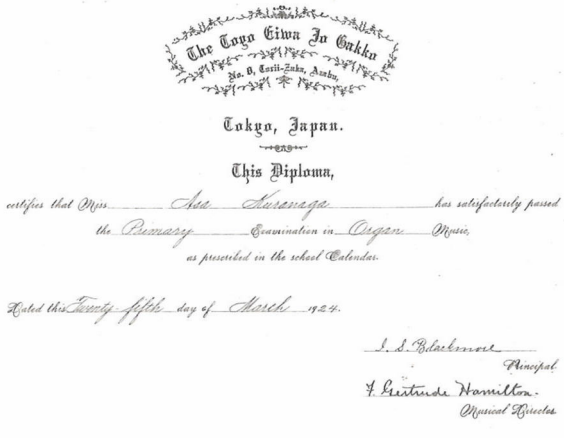
まだジュニアの試験を受けなかった頃、私が日曜学校時代から通っていた霊南坂教会のオルガニスト大中寅二先生（後に英和保育科の講師）のオルガンの音色の美しさ（同じリードオルガンでもその音色はそれまで知らなかった深いもの）に魅せられて、英和で習う以外のあの音色の美しさを出す事を覚えたいと父に話すと、しばらく考えていた父は承諾してくれた。当時英和のオルガン科の月謝は、本科の月謝以外に四円五十銭、そして大中先生への謝礼をと、直ぐ下に弟や妹もあるのに、その頃はまだ帝大の助教授であった父はよく

勉強させて、と今でも頭が下る想いである。

そのうち英和のオルガン科はすんだから、ピアノ科で勉強し、アメリカの音楽学校のパイプオルガンに入る様にと、ミス・ハミルトンにすすめられ、ピアノを猛勉強したが、オルガンとちがって非常に体力が要る故か肋膜を悪くして、あえなくピアノを止めてしまった。しばらくたち快復後パイプオルガンというのを取止めて、もっぱら大中先生に就きリードオルガン専門、そのうち先生は作曲の勉強もする様にとのお言葉で、先生の机の前で向いあって五線紙上の勉強をして頂いた。その後、先生はドイツに留学され、まだお下げ髪していた私は代りに教会のオルガンを時には結婚式やお葬式のまで奏いた事を覚えている。

一生涯いろいろの事に出会っても、こうして、心豊かに生きてゆく事が出来る様になったオルガンは何十年か前に、英和で習った明治時代からの足踏みのリードオルガンそのものである。ピアノと同じ鍵盤をしているが鍵盤の下には笛がならんでいるので、人間が口で笛を吹くのと同じに空気の加減を奏者自身の下半身の操作で表現し、指はさわる様に押すので、力を入れたりしなくとも、大きな会堂でも時に依っては充分なフォルティシモの音を出す事も出来る。

年をとり体力が無くなっても奏けるし、足のふみ方をごく少くすれば夜おそくても静かな音を出す事が出来る。最大の喜びは祈る気持で奏く最後のコードは奏者自身が黙禱して目をつむりたくなる様に消えてくれる。情感細やかな日本人にピタリの西洋楽器である。笛の音にうたの言葉を表したく、戦後私は好きな詩をよんでその心をオルガンで作曲した。そして共に英和を卒業した俳優で


The Tokyo Eiwa Jo Gakko
No. 9, Tsuji-Zaka, Aoba,
Tokyo, Japan.

This Diploma,

certifies that Miss Ase Suzunaga has satisfactorily passed the Primary Examination in Organ Music, as prescribed in the school Calendar.

Dated this Twenty fifth day of March 1924.

J. S. Blackmore
Principal
F. Gertrude Hamilton
Musical Director

オルガン科修業証書

演出家でもある長岡輝子氏が親友であるのを幸いに朗読して、私が作曲したものを、たとえば、島崎藤村、室生犀生、佐藤春夫、八木重吉、その他に沢山の詩を共演してオルガンの音色を紹介した。ラジオ東京とか、ＮＨＫでも奏いたことがある。

ことに聖書の言葉とか宗教詩の場合は、祈りの気持をその音色に深く托す事が出来る。手足は勿論、口もきけない身障者、水野源三氏の詩に作曲した時には、この地味なオルガンの音色にたましいが入っているとしか思えなかった。たまたま英和の大貫先生の御逝去のあと、先生の教会の宮本牧師が大貫先生の聖書の間にはさまれていた、ホイベルス神父推選の「この世の最上のわざは何？」との詩をお示し下さったのを、感激して涙しながら作曲したものを長岡氏の朗読と合せ奏いたときは、オルガンの種をまかれた東洋英和と先生方への長年の感謝の気持をはたした様な気がした。

戦前、大中寅二先生が、御自分の代りに私がＹＷＣＡに行って教える様にとの事で、今日までその教室をつづけているが、クリスチャンでない人

にでもそのよさがわかる様に指導し、また世間にはリードオルガンだけの会はないので、定期的に、会を催し、宗教的なものは勿論、パイプオルガンの曲を奏きたい時には、もう１台のオルガンでペダルオルガンの部を仲間同志で奏いて発表会を賑わしたりする。

オルガンを奏く喜びを、英和と大中先生に感謝しつゝ、次の世代の人たちに今日も楽しく伝えてゆく。（現在は、ＹＷＣＡでオルガンを教えていらっしゃいます。）　１９７９．８．３１

英和でバイオリンのレッスンを受けた頃

浦松　ヘレン（旧姓小林．昭和１７年卒）

バイオリンを習い始めたのは小六の時、小講堂で何曜日かの放課後バイオリンのおけいこをする音がしていて、私はバイオリンが大好きで、バイオリンが習えたらどんなに良いかと憧れていました。あの頃、諏訪根自子さんのすばらしいソロをラジオで夢中で聞いたものです。学校で教えていらした先生は男の先生で、とてもこわそうでしたが、女学校の堀内先生の御主人と伺い、何か安心致しました。

女学校になってからは、４階のピアノ室の一番右端の宮沢先生のお部屋でレッスンがあり、ピアノのリサイタルがある時は、時々バイオリンも出させて頂きました。途中から同級の増田さんや、一級上の森三枝子さん等が習い始められましたが、短期間に止めてしまわれ、がっかりしました。でも、とにかく私は卒業までがんばりました。その後何年位お稽古が学校で続いたかは存じません。

（玉川大学講師）

～～～◇～～～～◇～～～～◇～～～～◇～～～～◇～～～～◇～～～～◇～～～

東洋英和女学校規則

（明治四十年三月改正）

第二章　学　　則

第一節　学科要領

第二条　学科ヲ分チテ幼稚科、予科、本科、及高等科トシ別ニ琴、生花ノ随意兼修科及ビ裁縫、西洋音楽ノ専修科ヲ置ク。

第三節　学科課程、授業時間

第十三条　西洋音楽科ハ左ノ規程ニ依リテ教授ス。

楽器ハ「ピアノ」「オルガン」ノ二種トス。四学級ニ分チ教授時間ハ毎週三十分ヅツ二回、練習時間ハ毎日一時間トス

毎級独逸音楽家ノ著作ヲ主トス又古今作家中ノ適当ナルモノヲ選ミテ之ヲ補ヒ第四級生ニハ旋律和声ノ大概ヲモ授ク但卒業後ハ人ノ師範タルヲ得ベキ技倆ヲ有セシムル主意ナリ。

第四節　学期成績及学年成績。

第二十条　音楽及裁縫ノ専修科ハ卒業ノ上証書ヲ附与ス。

第六節　入学料、授業料、其他学費

第二十七条　西洋音楽科

ピヤノ、オルガン　一箇月　各金三円

規定時間ノ外尚ホ練習ノ為メ楽器ヲ使用スルモノハ毎日一時間ニ付一箇月金一円ノ使用料ヲ納ムベシ。

東洋英和女学校規則　（明治四十二年）

第一節　学科及修業年限

第一条　学科ヲ分チテ小学科、本科、高等科ノ三科トシ別ニ英語補習科、音楽科、裁縫科、生花ノ専修科ヲ置ク。

第六条　音楽専修科ハ之ヲ三学級ニ分チ楽器ハ「ピアノ」「オルガン」ノ二種トス。

一　第一学級ニ於テハ音楽原理ニ付根本的肝要ナル発達ヲ助クル練習簡易ナル曲ヲ教授ス。

一　第二学級ニ於テハ音階、和弦、音程、琵音研究等ノ外名士ノ作曲、唱歌、讃美歌等ヲ教授ス。

一　第三学級ニ於テハ長音階短音階（和声的、旋律的）半音階等ヲ暗記ニテ奏スルコト及ビ諸名士著作ノ曲ヲ教授ス。

但シ諸級ヲ通ジテ楽器取扱方音楽ノ歴史、理論ヲ授ク。

〜〜

○　ヴァイオリンは昭和十二年四月より、十六年迄の授業願、月謝領収証、中止願の綴が残されているのみで、現存の学則には見当らない。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

現在のピアノ科の教科課程

現在のピアノ科は6学級あります。それぞれの級の課程を勉強し、毎年教師会で定めた課題曲を準備して進級試験を受験することが出来ます。

1・2級は年2回（7，12月）、3級以上は1回（12月）に試験が行われます。54年度の課題は次の通りです。尚、右表の他に、全級に自由曲1曲と、初見、聴覚（和声、単音、リズムを含む）が課せられています。

右欄の一覧表中の略号は次の通りです。

ス……スケール	d……長調
ア……アルペジォ	m……短調
コ……コード	Oct……オクターブ
ブ……ブロークンコード	Kad……カデンツァ

現在のレッスンは週1回約30分で、授業料は月額5,500円です。

I級	ス…C，G，F－d 20ct，Kad．	バイエル100番 外2曲
II級	ス…C，D，B^{b}－d 40ct，Kad．	ツェルニー30の10 ソナチネI－8－1楽章
III級	ス，ア…C，A，E^{b}－d A，F$^{\#}$，C－m （和声的のみ） 40ct，Kad．	ツェルニー30の15 2声インベンション8 ソナチネI－2－1楽章
IV級	ス，ア，コ，… C，E，A^{b}－d A，C$^{\#}$，F－m （和声的，旋律的） 40ct，Kad．	ツェルニー40の11 2声インベンション11 ソナタ（モーツアルト） K280－1楽章
V級	ス，ア，コ，ブ… C，B，D^{b}－d A，G$^{\#}$，B^{b}－m （和声的，旋律的）	ツェルニー40後半より 3声インベンションより ソナタ，自由曲（全曲受持教師の選択）
VI級	ス，ア，コ，ブ…全調	エチュード2曲
	ツェルニー50，クラマー，バッハ平均律より ソナタ・全楽章，自由曲2曲（古典　近代曲） （全曲受持教師の選択）	

あとがき

課外についての記録は7号の予定でしたが、大幅に遅れている間に、ヴァイオリン科の記録がみつかりました。琴、その他の課外について御存知の方はぜひ御連絡をお願いします。（中・高部　中野・沓沢・朽木）